

産む

産む、産まない、産めない、
産ませる、産むかもしれない……。
医療が発達し、種の保存が多様化すると同時に
家族が核化し、個人の選択肢が増えた。
少子化といわれる時代に生殖の問題は、
個人個人、特に女性にふりかかっている。
共同体が築いてきた
「産む」をめぐる文化と、科学の進歩と、
個人・家族のかかわり方について考える。

産む」と・生まれる」と

松岡 悅子

(まつおか ゆうこ)

旭川医科大学助教授

「あなたはどんなふうにこの世に生まれましたか」と聞かれても自分がどうやつて生まれてきたかを思い出せる人はいないと思う(たぶん)。今生きている私たちはみんな、この世への境界を越えて

出産前後にはいくつもの儀礼やタブーが用意され、共同体の人びとは力を合わせてこの変化のときを乗り切ろうとしてきた。

子どもがどうやって生まれるのかという民俗生殖観はさまざまだ。卵子と精子が受精して子どもができるという科学的な生殖観は、体外受精や顕微授精などの生殖技術を産み出した。ところが科学的知識が行き渡った社会ほど妊娠の人が増え、そんな知識をもたない社会ほど簡単に子どもができるのは何とも奇妙なことだ、と南米アマゾンのヤノマミ族を研究する人類学者のガブリエルはいった。生殖の知識が子どもを作るわけではないのだ。

産むことは、生物学と文化の両方がかかわる。女性の体から赤ん坊が生まれるのは、今までのところ世界共通のことだが、その女性がどこで、どんな格好で、誰に介助され、どんな道具を用いて出産し、産後どんな過ごし方をするのかは文化によって異なる。たとえば先進国が多くて、いまマタニティーブルーや帝王切開率は四人に一人で高いといわれていた。でも今高さを誇っているのは、



帝王切開の後、母子の絆が深まるようにと、お母さんに赤ちゃんを見せる。ハンガリー



同じ病院で産んだお母さんたちが、その後も集まって子育て仲間を作っている。ドイツ



bangladeshisのタイとよばれる伝統的産婆。産後の区切りをつける儀式に招待され、取りあげた子どもを抱いて、満足そうなタイ



自宅の土間のござの上で、赤ちゃんがすりと誕生した。バングラデシ



ジャワ島の伝統的産婆ドゥンカンは、日に2回産婦の家に来て、赤ん坊に沐浴とマッサージをおこない、その後スウォーリングをする(布で体をくるぐる巻きにする)。そうすることで、赤ん坊の体を文化的なものに作り上げていく

会では、育児は前人未踏の困難な仕事になつていて。なぜそうなつてしまふのかは謎だ。これまでどこにでも当たり前の子どもは親やまわりを見習つて自然に一人前になるような社会なら、子育ての悩みは少ないだろう。でも私たちの社

生まってきた。文化人類学(民族学)では、産むこと、生まれることを通して儀礼とともに生きる。産む人は出産によって母の地位へと移行し、生まれる子どもはあの世の存在からこの世の存在へ

中国や韓国やベトナムなどの少し前まで途上国といわれた国々だ。韓国の農村部で四六・八パーセント、全国平均で三七・八パーセント(二〇〇〇年)、中国の南寧のふたつの病院ではいずれも約半分が帝王切開だった(二〇〇五年)。中国では、帝王切開の方が安全でよい分娩と考える女性が多いらしい。ヨーロッパでは、帝王切開は大切な性器を傷めない出産法として、セレブや女性産科医に選ばれている。

出産も子育ても、その文化のメンバーを再産する営みだから、その文化に合った人間を作るのが目的だ。子育てにグローバルスタンダードなどあり得ない。子どもは親やまわりを見習つて自然に生まれることや子どもを育てることが稀少価値になりつつあるのだろうか。



カナダの乳児用モカシン
(標本番号H75079)



ペルーの土人形 (標本番号H210110)



みつけく February 2006 02

死と再生の物語——現代に生きる禁忌と呪詛

中村 和恵（なかむら かずえ） 明治大学助教授

オーストラリア北端、アラフラ湿原に臨む中央アーネムランドの先住民ゴミュー・ティ・ラミンギンニンで、昨年一〇月、画家ビーター・ミングルの話を聞いた。アート・センターの庇に飾られた彼の絵の中下でビーターの解説を聞くのは、じつは二度目だ。四匹のウイティチとよばれる大ペビの間に、双頭のヘビ形がふたつ平行に並ぶ絵。だが今回、以前はいわなかたことをビーターは語りだした。ヘビの間にあるのは、「あれはミルキウエイなんだ」という。「天の川だから、魚が流れているんだ」。

ウイティチは、この地域の物語としてよく知られるワギラグ姉妹の話に登場する。水場にやがてきた姉妹の一人が出産（月経とも）の血で水を汚し、怒ったへビは彼女を飲みこむ。その声は雷、舌は稲妻、そして雨が降る。へビは天から落ち、姉妹と子を吐き出し、また飲みこみ、水に戻っていく。飲みこみと吐き出し、雨の開始と停止、死と再生。再生する魂は、魚の姿をしているという。この世から離れていた魚の魂は捕まえられ、また放たれ、新しい生命が誕生する。今や「現代」美術として世界的に評価されるアボリジナル・アートだが、ある種の絵の「内側」（深層）の意味は部外

者に不用意に公開されるべきではないと化することも少なくない。「秘審」の多家族ビーター・ミングルの話と結びいている。古代ははらかの意味で、生殖活動を含む死と再生の事象にかかわっている。どうやらビーター・ミングルの絵／物語の「内側」は相当に深遠である。私はやっとその一端を教えてもらいたにすぎない。

多くの文化において「産む」ことは、数々の禁忌や呪詛と結びいている。古くからそうであり、じつは現在もそうである。最近の少子化をめぐる議論にも、論理的分析だけでは理解しきれない側面がある。産まない女、女しか産まない女を罵る日本のことは、暗く恐ろしい。産まない女、女しか産まない女を罵る日本のことは、暗く恐ろしい。

石女、女腹、地獄腹。その一方で、多胎や多産の女を貶す畜生腹という語もある。産まない女、許されぬ出産を描いた物語なら、世界中、枚挙に暇がない。典型的なのはスペインのフェデリコ・ガルシア・ロルカの戯曲「イエルマ」だろうか。子どもを望まない、おそらくつくれない夫に對し、子どもがほしくて氣も狂いそぞろな、でもほかの男と逃げることはできな、因習に縛られた女。南アメリカのロレタ・ゴボの小説「でも彼らは死ななかつた」（邦訳題「女たちの糸」）は、もつと具体的かつ政治的である。アバルトハイ



ビーター・ミングルと彼の作品（屋根裏の2枚のうち右側）



提載許可：ビーター・ミングル、ベルンダ・スコット（Bula'bula Arts Aboriginal Cooperation）

胎児・胚・卵をめぐる科学に文化の知を

齋藤 有紀子

（さとう ゆきこ） 北里大学助教授

「子どもの胎衣（えんじ）、入手いたしました。このすばらしい自然の産物が、それを所持して陸海を旅する人びとを一切の災難事故から守ってくれる驚くべき効果については、すでに多くの人びとが体験されています」（一八〇〇年三月九日タイムズ広告、中沢新一「精霊の主」より）

一九世紀のイギリスでは、胎児を包裹する膜である胎衣を、頭にかぶつて生まれた子どもは特別な力をもつとされ、その胎衣は水難除けの魔力があると、船乗りに珍重されたらしい。そのような胎衣は、先のような廣告とともに、社会に先りに出されたという。

もちろんヨーロッパだけでなく、日本

にも、胎衣をめぐる言い伝えや風習は多くある。生命的誕生と、その附属物、副産物に、私たちの社会は、さまざまな意味や価値や用途を見いだし、畏怖や敬意を抱きながら、歴史をつづけているんだ」という。

ウイティチは、この地域の物語としてよく知られるワギラグ姉妹の話に登場する。水場にやがてきた姉妹の一人が出産（月経とも）の血で水を汚し、怒ったへビは彼女を飲みこむ。その声は雷、舌は稲妻、そして雨が降る。へビは天から落ち、姉妹と子を吐き出し、また飲みこみ、水に戻っていく。飲みこみと吐き出し、雨の開始と停止、死と再生。再生する魂は、魚の姿をしているという。この世から離れていた魚の魂は捕まえられ、また放たれ、新しい生命が誕生する。今や「現代」美術として世界的に評価されるアボリジナル・アートだが、ある種の絵の「内側」（深層）の意味は部外

た。しかし今、そのような文脈と接点をもたないまま、新しい医療技術が、ヒトの胎盤や生殖細胞、中絶後の胎児に実用的価値を見いだし、リサイクルを試みはじめている。

からだのあらゆる組織から取り出すことのできる幹細胞（ステムセル）が、また新しくからだの組織や臓器を形づくる能力をもつことが、近年明らかにされてきた。ステムセルを、目的的の臓器に分化・誘導することができれば、病気や事故で失った機能を取り戻したり、脳死判定や拒絶反応に悩む移植医療によって、幹細胞研究（一般に再生医療）が進んでいる。

日本では今、胚を使用する「ヒトES細胞の樹立及び使用に関する指針」（二〇〇一年）のみ規定が存在する。他の関連省庁が、現在も指針を策定中だ。議論の過程で完全に抜け落ちているのが、日本の民俗学・文化人類学的視点である。これをこのまま看過していくのは、難しいのではないだろうか。提供者・患者と科学を真にとり結ぶ日本の制度づくりのために、「産み」や「病」の周辺の伝承に耳を傾けてきた



枚方市百濟寺遺跡から出土した奈良時代の薬莖形土器。内部には和同開珎数枚とともに胎盤の痕跡と考えられる有機物が残っていた。後漢（胎盤）を埋葬する習俗は古く、広く分布していたが、奈良時代の日本にも胎盤を埋葬する習俗があったことが確認できる。写真提供：枚方市教育委員会

ファティマのお産——モロツコ・ベルベル人の村より

井家 晴子（いのえ はるこ） 東京大学大学院総合文化研究科・白本学術振興会特別研究員

村の無料診療所の看護師がいた臨月から二週間過ぎても、ファティマに出産のきさは見られなかつた。ファティマは長びく妊娠にそれほど恐れる様子はない。そして、今回の妊娠期間や腰痛の感じ方が今までの四人の娘たちとは違うことを私に告げ、無事に生まれればどちらだつていけれど、男の子なのかもしれないといった。

村の女性たちは、ファティマのなかなか生まれない子どもが、じつはアムグーン（胎児が妊娠初期に胎内で成長を止め眠るという信仰）になっていたのではなくかと噂をはじめた。そして三週目も過ぎ、みんなが忘れたころ、ファティマは出産したのである。

お産の場には、どこから噂を聞きつけた女たちが集まってきた。彼女たちはお茶を飲み、自分たちの体験や見聞

きした出産の話題に花を咲かせながら陣痛に苦しむファティマを励まし、伝統的出産介助者ウッタにあれこれアドバイスをする。ファティマは、にぎわう女たちに自分が今必要としているのは笑いで、はないと怒り、女たちはそんなファティマの性別を知ろうとファティマの足元に集まつた。「女でも男でもどちらでもいいわを制して言つた。されど今見た赤ん坊の性別を言おうとはしない。ファティマの目に涙があふれる。女たちは、今度は女児のよさ、男児のつまらなさについて話をぎわせはじめた。

出産を外で待つていた夫が部屋に入ってきた。女たちは口々に祝福のことばを

* 人びとの日常生活から「魔術（イムクラール）」は切り離せない。イムクラールとは単なる魔術「スフル」だけでなく、傭みを含んだ魔術全般を指している。何かよくないことが起こると、人びとは誰かに傭みを解くためにさまざまな方法を試みる。ファティマは、夫が出て行つた後、ファティマはため息つき、母が用意した、魔術（イムクラール）を解くクトゥーランとよばれる黒い液と草刈縫を開めていた。「まだ産むつもりなのか」「女でも男でもどちらで



伝統的出産介助者。出産経験の豊富な年長者が多い



赤ちゃんは半日以上、糞虫のようにくるまるて過ごす

「他の人を娶つてください」——インド農村部の複婚

松尾 瑞穂

（まつおみずほ） 総合研究大学院大学文化科学研究所

「私が両親と相談して決めたのよ、妹と夫を結婚させようつてね」

結婚して一五年たつても子どもができないなかたラタさんは、一〇歳以上年の

離れた末の妹を夫に嫁がせて、今は三人で暮らしている。体外受精を含む生

殖医療技術があるとはいって、いままだ都市の富裕層に限られており、普通の人

びとに手が届かない。かつては父系親族内での養子縁組もみられたが、家族計画の普及で子どもはみんな一人か二人。そもそも養子にもらえるような子どもがいるのだ。

そんな夫婦にとっての解決法は、夫がもう一人、妻を娶ること。一夫一妻が決まりで、結婚が聖なるものとされる

ヒンドゥー社会では、法律でも複婚は禁止されている。しかし、子どもができる夫婦に対しては、公ではないとしても「仕方がない」と共同体でゆるやかに認められている。二人目、三人目の妻であっても「結婚」といい、決して俗にいうお妾さんというわけでもない。通常は子どもができないことにしびれを切ら

した夫側が、ほかの女性を連れてくることが多い。結婚が聖なるものである以上、妻としては離婚だけは何としても避けたいし、そのためならば夫に「他の人を娶つてください」と自らもしかけることもある。子どもができないことは「女性の責任」だとして、夫も姑もそれを当然と受け止め、自分から言い出さない妻に周囲の女性たちは「あんたも強情ねえ、旦那に結婚せなさいよ」と口出しをする。それで体調を崩し、痩せていく女性たちに私は何人も見た。

しかし当の女性たちも意外としたたかである。既に六〇歳を超えていたマランさんは、以前、出身村から知的障害のある女性を連れてきて夫に娶らせたことがある。このような場合は、子ども

ができた後妻に追い出される心配はなく、自分が第一妻として君臨することができます。しかし、長い目でみると、このような婚姻形態は持続的な「家族」を形成するものではなさそうである。多くの場合は、どちらか一方が婚姻を去つたり、別居したりして、最終的には一夫一妻に落ち着くようだ。このあたりが、必要に迫られて場当たり的におこなわれているヒンドゥー社会の複婚の不安定さを示しているのだろう。

ラタさんの妹は妊娠した。「子どもは守る」と妹の競争相手ではなく保護者としてふるまうことを選んだラタさんとの「家族」がどのような軌跡をたどるのか、見守りたい。

立ち入れなかつた世界——ビルマの農村

田村 克己

（たぢら かつみ） 民族社会研究部

若いころの「失敗」である。

ビルマ（現ミャンマー）の農村でファイルドワーカをおこなつたある朝、起きて向かいの家を見ると、高床式家屋の床下のところに、竹を編んだものが張りめぐらされており、村の産婆がなかに入っているという。産婆の夫は、いささか所在なげに、落着きなく家まわりの仕事をしていた。そつこうするうちに、近

所の男性が私のもとに駆け寄ってきて時計をもつた私に今の時刻を尋ね答えるとまた飛ぶように引き返していく。

ビルマでは子どもが誕生すると出生票ともいべきものが作られる。ヤシの葉を乾燥したものに、名前や生まれた年月日、何時何分何秒までが刻んで記されており、人生の節目の大切な式を受けるときなど、それをもとにも

つとも吉兆の時が占われる。

時刻を尋ねたのが、私に「(なか)に入つて見るか」とつづく。思ひ返すに調査の貴重な機会を逃したようでは、命の誕生という事態に臨めばよい。私は「いや」と答えてしまつた。思い返すに、出産を司り、母子を守る



ビルマの母神像。「西の御母堂」の名をもち、出産を司り、母子を守る（標本番号H210099）

家族にやさしいお産

北島 博之

(きたじま ひろゆき) 大阪府立母子保健総合医療センター新生児科部長

日本の歴史上初めて医療施設分娩がほとんどを占めるようになってから四〇年が経つ。今三〇歳台の母親たちは生んだ女性たちは、この大きな変化を体験した最初の世代である。医師と見知らぬ助産師による分娩台を用いたお産で、完全母子異室制であった。

最近、職場で助産所のような分娩室を試み始め、懇意にしている看護師の第二子、第三子のお産に立ち会うことができた。第二子のときは家族皆が見守るなか、産婦の母がひときわ真剣にお産を見つめていた。じつは産婦の母はかつて第

助産師の出番を

日隈 ふみ子

(ひのくま ふみこ)

京都大学教授



短期大学助産学専攻科における病院出産体位の介助練習風景



女性が産みやすい体位での介助技術も重要である。側臥位(横向きでの体位)とともに、四つんばい体位の介助練習風景。写真提供:神森あすか

医療化された出産への反動からか、助産院出産や自宅出産への関心も高まっている。同時に、病院では、産科医師不足の理由で、助産師を活用されることなく産科病棟の閉鎖現象が起きている。このようなニーズ、ギャップを埋めるべく助産師の活躍が期待されるのだが、

妊娠出産ケアを医師の指示なく実践できる独立開業権が与えられているにもかかわらず、助産師が十分に活用されていらないという現状がある。その理由と打開策を考えてみたい。

まず原因のひとつは教育にある。看護学教育の上に一年間あった助産学教育

一子の妊娠・出産を喜ばず、このお産の立ち会いも拒否していたが、夫妻の説得でやっと参加したのであった。結果、産婦の母は生まれた第三子をかわいがり、子育てが楽になつたという。第三子のときは最初から笑顔で立ち会ってくれ、夫や上の子どもたちとともに気持ちのよいお産ができた。その後、これまで一五年以上つきあってきた彼女が、自分の母とうまくやかなかなつた少女時代を、初めて話してくれた。

成育医療センター研究では初産の母子で児が一歳半の心理検査中にビデオ

撮影し、動物行動学的に解析した。助産院・BHF(赤ちゃんに優しい病院)と一般産科病院・市民病院・総合周産期センターといった分娩施設別に、母子関係を探るために、入室時の児の啼泣の少なさ・児の発話総量・母の共鳴や共感の行動から、ほかの施設に比べて助産院とBHF産科病院は双方ともに安心度が高いことがわかった。これは母子支援(出生時の長い早期接触・家族立会い・既知の助産師・母子同室)に多くの人が起因すると思われた。

正常なお産において、医療者は安全

は、大学化にともない、選択制が主流となりつつあり、十分な教育とはいえない。また、病院の助産師は看護師と同じユニフォームで三交代制の勤務形態である。外見では妊娠健診を医師が担当し、出産の現場では、陣痛中の持続モニター管理や点滴会陰切開など医療介入の多

いなか、助産師は医師の主導のもとで出産助効をおこなう。助産師に自立した役割が任せられない。助産師として妊娠期から関わることで、その意識も能力も養われるが、これでは力が育ちもせず、發揮もできずに助産師は産科看護師と化している。

一方、開業助産師は、妊娠中から出産、母乳育児まで継続的なケアを提供し、出産中は女性をそばで温かく見守り、家族とともに出産できる環境のなかでケアを実施していく。このような出産を体験した女性は、自分で産んだという大きな自信と満足を得ている。ただ、このようなケアを受けられる女性は全出産者のわずか二六・七%弱でしかない。若手の助産師も開業しつつあるが、開業助産師の高齢化も進んでいる。

現状打開のために、一部ではあるが、

開業助産師の指導のもとで病院内に助産師主導の妊娠出産ケアシステムが作られ、昨年より、自立した助産活動ができる助産学の専門職大学院もできた。よいケアを受けた女性たちがもっと助産師の出番をと求めている。助産学教育のさらなる充実、病院と地域助産師の連携、潜在助産師の再教育などが望まれる。そして、助産師主導の出産ケアシステムの拡大を図ることは、女性にとっても、助産師にとっても、不足している産科医にとつても急務である。



上の子がお産に立ち会うと、母親は子育てが楽に感じられるという報告もある。写真提供:和田聰子

女の戦いからいイベントへ

宮崎 亮一郎

(みやざき りょういちろう)

順天堂大学助教授

古事記には、伊邪那美命が火の神を出産するときに炎によって外陰部が焼かれてしまい、それがもとで死んでしまったという記述がある。この炎を出血と読み替えることはできないであろうか。

出産後の出血は見たものでなければわからないほど激しく、まるで炎のようなくらい出てくる。男は戦で生死を分けて戦うが、女は出産を、生死を分ける一生の仕事としていた。一九〇〇年の日本の妊娠死率は五人、現在の六一七人とは比較になら

ないほど高い死亡率であった。産婆を中心とした自宅、あるいは特別に設けられた出産場所では、まさに生死を分けうる女の戦いが繰り広げられていた。そこには男がに入る余地などなかった。

妊娠死死亡率が劇的に低下したのは一九七〇年代以降、出産場所を自宅から施設(診療所・病院など)で出産するようになつたことであり、今から二三十年前には妊娠死死亡率が低下しない。比較的安全に出産ができるようになり、新生児死亡率も低下したため、出産回数

たりまえになつていった。

安全性が確保されると、いつのまにか女の一生の仕事というよりイベント的感覚で捉えられるようになった。出産を快適で充実したものにしたい。そう願う妊婦の選択肢のひとつとして注目されるのが自宅分娩である。施設での出産に莫大な費用がかかる諸外国では、出産場所は自宅・助産所しかない。あるいは自宅分娩では妊娠死死亡率が低下しない。一部の先進国では、施設分娩と誇張するため、快適性を重視した分娩

にもといったイメージが強いのでは……。



ういった状況が知られないまま、一部の女性の経験談が集団を動かし、人はそれに共感する。しかし、年齢、健康状態、家庭の環境など、人それぞれ条件が異なるといったことを十分に考えているのだろうか。人の人ができるなら私も

出産を、生死を分ける一生の仕事としていた。一九〇〇年の日本の妊娠死率は五人、現在の六一七人とは比較になら